

**関西学院大学**  
2012年度  
**自己点検・評価報告書**  
(付:大学基準協会認証評価結果)

---

**神学研究科**



2014年3月

本書は、大学評価（認証評価）のために本学が大学基準協会に提出した「関西学院大学 2012 年度 自己点検・評価報告書」（2013 年 3 月）と大学基準協会の評価結果（2014 年 3 月）である。

構成は、大学基準協会の評価結果（結果と総評の前文）、各章の報告書における本学の記述（1～3）と大学基準協会の評価結果であるが、章によっては評価結果がないものがある。

## 評価結果

評価の結果、貴大学は本協会の大学基準に適合していると認定する。

認定の期間は 2021（平成 33）年 3 月 31 日までとする。

## 総評

貴大学は、1889（明治 22）年にキリスト教主義教育という理念のもと、神学部と普通学部を持つ「関西学院」として創立された。1932（昭和 7）年に「大学令」による旧制大学へと移行した後、1948（昭和 23）年に学校教育法により新制大学となり、学部・学科および研究科の改組、キャンパス開設を経て、現在は 11 学部（神学部、文学部、社会学部、法学部、経済学部、商学部、理工学部、総合政策学部、人間福祉学部、教育学部、国際学部）、13 研究科（神学研究科、文学研究科、社会学研究科、法学研究科、経済学研究科、商学研究科、理工学研究科、総合政策研究科、言語コミュニケーション文化研究科、人間福祉研究科、教育学研究科、司法研究科、経営戦略研究科）を擁する総合大学へと発展している。キャンパスは、兵庫県西宮市の西宮上ヶ原キャンパスのほか、隣接する西宮聖和キャンパス、同県三田市に神戸三田キャンパスと 3 キャンパスを有し、キリスト教主義に基づく教育・研究活動を展開している。

なお、経営戦略研究科経営戦略専攻は 2009（平成 21）年度に特定非営利活動法人 A B E S T 21 の専門職大学院認証評価を受けており、それ以降の改善状況を踏まえて、大学評価（機関別認証評価）の観点から評価を行った。司法研究科は本年度に公益財団法人日弁連法務研究財団の専門職大学院認証評価を、経営戦略研究科会計専門職専攻は本年度に特定非営利法人国際会計教育協会会計大学院評価機構の専門職大学院認証評価を受けているため、基準 4「教育内容・方法・成果」について、それぞれの専門職大学院認証評価結果に委ねる。

# 第1章 理念・目的

## 1 現状の説明

### (1) 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。

神学研究科は、神学部と同じく関西学院創立時の基本理念を継承し、キリスト教会やキリスト教主義学校教育、社会福祉や社会活動などの領域において指導的な役割を果たすことができる、高度な専門的知識を具えた職業人を育成することを目的とする。併せて、幅広くキリスト教に関する知見を具え、多元化社会において深い見識の下、具体的な社会や世界の問題を発見し、これと取り組み、解決できる人材を育成することをも目的とする。このことは関西学院大学大学院学則第1章第3条第3項(別表)「人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的」に示している。<sup>1-22)</sup>

神学研究科では、神学を専攻領域とし、その中に、4つの研究分野(聖書分野、歴史・文化分野、組織・思想分野、実践分野)を設けている。学生各自が研究主題を選び、指導教員との学問的、人格的な触れ合いによって、それを深め、学位(修士、博士)を取得できるよう、研究と教育を行っている。博士課程前期課程キリスト教神学・伝道者コースにおいては、キリスト教界の指導者となるための実践的な能力を育成するカリキュラムを設ける一方、キリスト教思想・文化コースにおいては、特にキリスト教の歴史・文化、思想分野における専門知識と思索を深めるべく科目群を用意している。さらに後期課程では、神学専攻の研究者育成を目指している。高度な神学研究を続けるために必要な知識と論文執筆や学会発表のできる学問的な能力、文献読解に必要な古典語および外国語を自由に駆使する能力を高め、3年間にわたり専門分野の研究に集中して取り組み、神学の専門家として社会と教会とに貢献できる人材の育成を目指す。神学研究科の教育目標および人材育成の目標については以下のとおりである。

- ①キリスト教神学、キリスト教思想・文化の高度な研究の推進:神学の基礎的な知識に裏打ちされて、専門的な知識と思索を深め、各自の専門領域において、優れた特色ある研究を行えるよう、指導する。
- ②キリスト教の宣教に従事する専門的職業人(伝道者)の育成:ことに博士課程前期課程キリスト教神学・伝道者コースにおいては、礼拝の指導者、説教者、牧会者として宣教の現場で直ちに活躍しうる人材育成を目指す。さらに、教会などのフィールドで経験したことを理論的に反省し、それを再び実践へと活かすことのできる能力を育成する。
- ③総合的な知を身につけた社会人の育成:キリスト教の本質にふれつつ、幅広くキリスト教に関する知見を養い、多元化社会において深い見識をそなえ、具体的な社会や世界の問題を発見し、これとキリスト教的な立場から取り組み、解決できる人材を育成する。<sup>1-23)</sup>

神学研究科では、神学部での履修コース制の完成年度を受けて、2008年度よりキリスト教神学・伝道者コースおよびキリスト教思想・文化コースの2コース制(履修コース制)を開始し、さらなる展開を目指している。このような柱となる施策は本理念・目的に裏打ちされている。神学研究科の理念・目的は学院創立時の精神を引き継ぎながらも、現代に求められる新たな展開という時代の変遷を踏まえたものとなっており、適切に設定されているといえる。

**(2) 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員(教職員および学生)に周知され、社会に公表されているか。**

学生にはセメスターごとの履修計画を立てる際に参照する『履修・学習要覧Webサイト(大学院用)』の冒頭に掲載することで、都度周知している。神学研究科(神学部)教職員には毎年度の自己点検・評価作業の過程で、自己評価委員会(研究科)および神学研究科委員会構成員にて確認を行っている(ただし、神学部施策との関連性から神学部教授会にて一括で確認を行っている<sup>1-46)</sup>)。また受験生を含む一般にも、関西学院公式Webサイトの神学研究科のページにて公開しているほか<sup>1-23)</sup>、文面を整理して他研究科の理念・目的とともに学則別表として掲載している。<sup>1-22)</sup>

**(3) 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。**

2010年度に学位授与方針を策定する過程で検証を行った。また、教育課程の編成・実施方針策定(2011年度)の過程や、付随する施策を検討する際などにも大学院教務学生委員(教務担当教員)を中心とするカリキュラム研究委員会(研究科)にて常に参照し、その適切性について確認をした。また、毎年度の自己点検・評価作業においては研究科委員長の責任の下、自己評価委員会(研究科)が施策の進捗とともに点検・検証し、神学研究科委員会構成員を経て(ただし、神学部施策との関連性から神学部教授会にて一括で確認を行っている)学内第三者委員会へ報告している。<sup>1-119)</sup>

**2 点検・評価**

**(1) 効果が上がっている事項**

なし

**(2) 改善すべき事項**

なし

**3 将来に向けた発展方策**

**(1) 効果が上がっている事項**

なし

**(2) 改善すべき事項**

なし

## 第3章 教員・教員組織

### 1 現状の説明

#### (1) 大学として求める教員像および教員組織の編制方針を明確に定めているか。

教員組織の編制方針については、神学研究科委員会に以下のような共通理解があり、神学部教員組織と綿密に連携しつつ任用を行っている。

- ① 学部の人員配置を踏まえ、聖書分野、歴史・文化分野、組織・思想分野、実践分野の各分野に、専任の教員を任用・配置する。
- ② 学部との連携のもとで、伝道者養成という研究科の理念・目的を達成するため、教員はキリスト教会の教職者を中心とする。しかし、分野・業績・教歴などを勘案して、信徒の教員を採用することも妨げない。
- ③ 授業担当や教育は、キリスト教神学・伝道者コース、キリスト教思想・文化コースの両コース共、神学研究科の全教員によって担当する。

以上の共通理解は、毎年度の自己点検・評価作業に基づいて神学研究科委員会で承認されるなどしているが<sup>3-49)</sup> (ただし、神学部施策との関連性から神学部教授会にて一括承認を行っている) 統一的に明示されているとは言えない。まずは神学部の明示を待ち、それを受けてさらに整理を行い、2013年度を目処にして明示する予定となっている。なお、神学研究科教員の任用・配置については、神学研究科博士課程前期課程あるいは後期課程指導教員委員会<sup>3-17)</sup> において検討を行い、最終的に神学研究科委員会にて決定している。博士課程前期課程においては2012年度より指導教員として准教授1名(実践分野:実践神学・臨床牧会)を任用し(2011年度研究科委員会決定)、多様化する学生の研究テーマに対応している。

#### (2) 学部・研究科等の教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。

2010年度には学位授与方針を策定したが、その過程において大学院教務学生委員(教務担当教員)を中心としたカリキュラム研究委員会(研究科)にて教員組織の適切性について検証し、加えて教育課程の編成・実施方針、カリキュラム・マップの策定の都度、同様の検証を行っている。2012年度現在の神学研究科専任教員10名(女性教員1名、外国人教員1名を含む)のうち、研究指導教員は博士課程前期課程9名、後期課程4名(うち、教授数はそれぞれ8名、4名)、研究指導補助教員はそれぞれ1名、6名となっており、設置基準上の必要専任教員数を満たしている。<sup>3-67)</sup> また博士学位の取得者は博士課程前期課程6名、後期課程4名である。さらに牧師資格(日本基督教団教師資格)を有する者は7名(63.6%)、宣教師(国外)の資格を有する者は1名(9.1%)となっており、神学研究科が設定する各分野(聖書分野、歴史・文化、組織・思想、実践)に照らしても、教育課程に相応しい教員組織が整備されているといえる。

#### (3) 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか。

教員の募集・採用・昇格(昇任)については神学部に準じた手続きとなっている。大学院教員および大学院指導教員の任用については全学規程である「大学院教員及び大学院指導教員選考基準」および「大学院研究科委員会規程」、ならびに神学研究科独自の規程である「神学研究科委員会内規」<sup>3-105)</sup> に基づいて適切に行われている。

#### (4) 教員の資質の向上を図るための方策を講じているか。

カリキュラム研究委員会傘下に設置されたFD委員会(研究科)の下で、年に3回のFD研修

会(研究科)を開催している(うち1回は非常勤講師対象。具体的な研修テーマについては4.3-1-(4)を参照のこと)。その他、社会活動については神学部における記述に重複する。

## 2 点検・評価

### (1) 効果が上がっている事項

なし

### (2) 改善すべき事項

なし

## 3 将来に向けた発展方策

### (1) 効果が上がっている事項

なし

### (2) 改善すべき事項

なし

## 評価結果

### 総評

教員組織の編制方針については、分野ごとの教員配置の考え方やキリスト教会の教職者を中心とするなど、「研究科委員会」内で共通理解があるが、明文化されていない。神学部の編制方針の策定を待ち、2013(平成25)年度を目処に研究科として統一的に示す計画としている。

教員組織の実態は、牧師と宣教師の有資格者の配置に配慮しつつ、聖書分野、歴史・文化、組織・思想、実践の教育課程の分野に即して適切に編制されている。

募集・採用・昇格については、全学的な規程のほか、「神学研究科委員会内規」に基づいて、神学部としての採用とともに行われており、その適切性・透明性が担保されている。また、研究科の授業担当資格基準および手続きは「神学研究科委員会内規」に示されている。

教員組織の適切性は「自己評価委員会」にて検証しており、人事計画の検討については「部長室委員会」「研究科委員会」が行っている。

## 第4章 教育内容・方法・成果

### 1. 教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針

#### 1 現状の説明

##### (1) 教育目標に基づき学位授与方針を明示しているか。

神学研究科の理念・目的に基づき、以下のとおり学位授与方針を明示している。

##### ＜博士課程前期課程の学位授与方針＞

博士課程前期課程の教育目標を下記の通り定め、本課程に2年(4学期)以上在学して所定の単位を修得し、かつ研究指導を受けた上、修士論文を提出して、その審査および所定の試験に合格した者に修士の学位を授与する。

- ①神学の基礎的な知識に裏打ちされて、専門的な知識と思索を深め、各自の専門領域において、優れた特色ある研究を行う能力を修得している。
- ②キリスト教神学・伝道者コースにおいては、礼拝の指導者、説教者、牧会者として宣教の現場で直ちに活躍しうる力量を身につけている。さらに、教会などのフィールドで経験したことを理論的に反省し、それを再び実践へと活かすことのできる能力を修得している。
- ③キリスト教の本質にふれつつ、幅広くキリスト教に関する知見を養い、多元化社会において深い見識をそなえ、具体的な社会や世界の問題を発見し、これとキリスト教的な立場から取り組み、解決できる力量を身につけている。

##### ＜博士課程後期課程の学位授与方針＞

博士課程後期課程の教育目標を下記の通り定め、本課程に3年(6学期)以上在学して所定の研究指導を受けた上、博士論文を提出して、その審査および所定の試験に合格した者に博士(課程博士)の学位を授与する。

高度な神学研究を続けるために必要な知識と論文執筆や学会発表のできる学問的な能力、文献読解に必要な古典語および外国語を自由に駆使する能力を高め、3年間にわたり専門分野の研究に集中して取り組み、神学の専門家として社会と教会とに貢献できる能力を修得している。[4.1-29\),4.1-30\)P.9～15](#)

##### (2) 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか。

神学研究科では、神学を専攻領域とし、その中に、4つの研究分野(聖書分野、歴史・文化分野、組織・思想分野、実践分野)を設けている。学生各自が研究主題を選び、指導教員との学問的、人格的な触れ合いによって、それを深め、学位(修士、博士)を取得できるよう、研究と教育を行っている。教育課程の編成・実施方針については、教育目標に基づき以下のとおり方針を明示している。

##### ＜博士課程前期課程の教育課程の編成・実施方針＞

- ①キリスト教神学・伝道者コースにおいては、キリスト教界の指導者となるための実践的能力の育成を目指し、またキリスト教思想・文化コースにおいては、特にキリスト教の歴史・文化、思想における専門知識と深い思索を培った人材育成を目指す。
- ②上記目標に向け、2コース・4分野ごとに必修科目および選択必修科目を定め、研究演習を含む32単位を修了必要単位とする。また、多様な研究テーマに応えるため、指導教員以

外に副指導教員の指定を可能としている。

- ③ 修士学位取得に向け、「研究計画書」「年次報告書」「修士論文題目届」「中間発表」「修士論文」「口述試験」というプロセスを設け、計画的な研究遂行と論文作成を促進する。

#### ＜博士課程後期課程の教育課程の編成・実施方針＞

- ① 神学専攻の研究者育成を目指している。高度な神学研究を続けるために必要な知識と論文執筆や学会発表のできる学問的な能力、文献読解に必要な古典語および外国語を自由に駆使する能力を高め、3年間にわたり専門分野の研究に集中して取り組み、神学の専門家として社会と教会とに貢献できる人材の育成を目指す。
- ② 博士学位取得に向け、「研究計画書」「学会発表」「年次報告書」「年次計画書」「論文」「博士論文題目届」「博士學位申請論文」「公開口頭試問」というプロセスを設け、計画的な研究遂行と論文作成を促進する。[4.1-29](#),[4.1-30](#)p.9～15

### **(3) 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針が、大学構成員(教職員および学生等)に周知され、社会に公表されているか。**

神学研究科の教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針については、履修コースおよび研究分野(領域)別の「履修モデル」とともに大学および関西学院公式Webサイト神学研究科のページに公開している。[4.1-84](#),[4.1-29](#),[4.1-85](#) また各方針および履修モデルについて、毎年度初めに学生へ配付する『履修の手引』(履修心得)[4.1-30](#)p.9～15 へも掲載するとともに、入学生および在学生対象の履修指導で学修計画の参考にするよう促している。

また、授業担当者には、FD研修会(研究科)の場などで各方針についての説明を実施している。

### **(4) 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性について定期的に検証を行っているか。**

3つの方針(学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、学生の受け入れ方針)を策定した後、今後は各方針に基づいた学位授与および修了認定基準の明示に向けて具体的に検討を開始しており、2012年度より「修士論文」「博士論文」審査基準の明確化の作業に取り組むことが決定し、検討が進んでいる。[4.1-108](#) が、その過程で適切性の検証を試みる。なお、博士課程前期課程においては「履修モデル」の検討・公表に際して、大学院教務学生委員(教務担当教員)を中心に一定の検証は行っている。例えば2つの履修コース(キリスト教神学・伝道者コースおよびキリスト教思想・文化コース)あるいは4分野(聖書分野、歴史・文化分野、組織・思想分野、実践分野)を前提とする教育課程の編成・実施方針に基づいた各授業科目(必修あるいは選択科目)を履修モデルに落とし込んだ場合、神学研究科の定める修了要件に適合しているとの判断である。

定期的な検証体制については、毎年度の自己点検・評価作業において研究科委員長の責任の下、自己評価委員会(研究科)が施策の進捗とともにその関連性から、適切性を点検・検証し、神学研究科委員会(ただし、神学部施策との関連性から神学部教授会にて一括で確認を行っている)を経て学内第三者委員会へ報告を行うことになっている。[4.1-109](#)



## 2 点検・評価

### (1) 効果が上がっている事項

なし

### (2) 改善すべき事項

なし

## 3 将来に向けた発展方策

### (1) 効果が上がっている事項

なし

### (2) 改善すべき事項

なし

<b>評価結果</b>
-------------

## 総評

貴研究科の教育目標に基づいた学位授与方針として「神学の基礎的な知識に裏打ちされた、専門的な知識と思索を深め、各自の専門領域において、優れた特色ある研究を行う能力」（博士課程前期課程）、「高度な神学研究を続けるために必要な知識と論文執筆や学会発表ができる学問的な能力」（博士課程後期課程）などが定められている。これらの学位授与方針を反映して、博士課程前期課程3項目、博士課程後期課程2項目の教育課程の編成・実施方針が示されているが、人材養成の目的や学位審査のプロセスに偏っている記述が見受けられる。

教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針については、毎年度の自己点検・評価作業において研究科委員長の責任の下、「自己評価委員会」が施策の進捗とその関連から、これらの適切性を検証し、「研究科委員会」を経て、「学内第三者委員会」に報告している。

## 第4章 教育内容・方法・成果

### 2. 教育課程・教育内容

#### 1 現状の説明

##### (1) 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の策定・明示を行った一方で、[4.2-35](#),[4.2-36](#)p.9~<sup>15</sup> 2008年度に設定した「学位取得(修士・博士)までのプロセス」に基づく教育・研究を、一定の方針として遂行している。[4.2-37](#) このプロセスでは、課程を通じての「研究計画書」あるいは各年度における「年次報告書」の作成による各自の研究テーマ設定やそれらに基づく研究指導(論文指導)が重視されている。複数指導制度や指導教員の変更制度なども整備されており、[4.2-38](#) その点においてコースワークに偏らない教育体系となっている。

カリキュラム・マップについては、学位授与方針ならびに教育課程の編成・実施方針の明示を受け、すでに検討を開始しており、2012年度中に策定を完了の予定である。

なお、いわゆる「神学」未修者や長期に渡って学修から遠ざかっていた者(他分野からの進学者、社会人入学生など)のために神学基礎科目を開講し、伝道者育成に向けた基礎学力修得の配慮を行っている。

##### (2) 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

博士課程前期課程では、キリスト教神学・伝道者コースおよびキリスト教思想・文化コースの学生が、4分野(聖書、歴史・文化、組織・思想、実践)における多角的な研究を可能とする必修科目・選択必修科目を設定している。また、いわゆる「現場」での学びを重視しているため、講義科目・演習科目のほかに実習科目(「教会実習」「キリスト教社会実習」「臨床牧会実習」)を設けており、この多様性の中での望ましい「履修モデル」を関西学院公式Webサイトおよび『履修の手引』(履修の心得)で、履修コース別・専門分野別に明示している。[4.2-37](#)

現在、学位授与方針の策定・明示に引き続き、教育課程の編成・実施方針の策定・明文化、および公開を実現したところであるが(2011年度)、今後はその教育課程の編成・実施方針が、各授業の「到達目標」の要素としてシラバスへ反映されるよう取り組む。

#### 2 点検・評価

##### (1) 効果が上がっている事項

なし

##### (2) 改善すべき事項

なし

#### 3 将来に向けた発展方策

##### (1) 効果が上がっている事項

なし

## (2) 改善すべき事項

なし

### 評価結果

#### 総評

教育課程の編成・実施方針および「学位取得（修士・博士）までのプロセス」に基づき、教育および研究を一定の方針の下に遂行している。講義科目、演習科目の他に「教会実習」などの実習科目を設け、現場での学びを重視し、リサーチワークに偏らない教育課程の編成がされている。また「研究計画書」あるいは各年度における「年次報告書」の作成による各自の研究テーマ設定や、それに基づく研究指導（論文指導）において、リサーチワークの要素も適切に組み合わされている。しかし、一部の科目において学部との合同授業が行われているが、成績評価基準が区別されていないので、改善が望まれる。

教育課程の適切性については、「研究科委員会」が責任主体となって検証を行い、カリキュラム・マップの策定など改善に繋げている。

#### 大学に対する提言

##### ○努力課題

**\*対応状況を「改善報告書」としてとりまとめ、2017（平成29）年7月末日までに本協会に提出することを求める。**

- 1) 神学部・神学研究科では、成績評価方法などを課程ごとに明確に区別していないなかで、学部・大学院の合同授業が開講されていることは、学位課程の趣旨に照らして、改善が望まれる。

## 第4章 教育内容・方法・成果

### 3. 教育方法

#### 1 現状の説明

##### (1) 教育方法および学習指導は適切か。

シラバスについてはすでに関西学院公式Webサイトで公開されているが、それに加え、学位授与方針を公開し、学生には毎年度、履修計画に際して参考とするよう指導している。論文作成については「学位取得(修士・博士)までのプロセス」(2008年度設定)<sup>4.3-51)</sup>に基づき、毎年度の「研究計画書」を学生自身が作成し、指導教員はそれに基づいて研究指導を継続している(作成した「研究計画書」は年度初めに神学研究科へ提出)。また、後期課程においては神学研究科論究『神学研究』への論文投稿および学会での研究発表を促している。加えて、多様化する学生の研究課題に対応するため、「複数指導制度」を2006年度より導入している。<sup>4.3-52)</sup>

##### (2) シラバスに基づいて授業が展開されているか。

現行、神学研究科のシラバスは次の項目にしたがって作成している。「授業の目的」「授業内容および授業方法」「テキスト」「成績評価方法および基準」「学生による授業評価の方法」「キーワード」「その他」。このうち、次の項目は必須入力となっている。「授業の目的」「授業内容および授業方法」「成績評価方法および基準」。また、すべてのシラバスは、年度開始にあたりWebで公開され、学生の履修計画の材料として活用されている。シラバスの記述について、2011年度中に策定(明文化)・公開した教育課程の編成・実施方針に基づいた記述を考慮・徹底し、それらに沿った授業展開を目指すべく、2011年度秋学期に「3つのポリシーとシラバスについて」をテーマにFD研修会(研究科)を実施したが、いまだ授業の「到達目標」に関する記載が不十分であり、2013年度に向けてさらに記載の徹底を図っていく。

##### (3) 成績評価と単位認定は適切に行われているか。

2011年度に整えた三方針(学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、学生の受け入れ方針)を受けて、適切な成績評価と単位設定の構築段階に進む予定である。博士課程前期課程ではキリスト教神学・伝道者コースおよびキリスト教思想・文化コース、そして4分野(聖書、歴史・文化、組織・思想、実践)において多角的な研究を可能とする必修科目・選択必修科目を体系的に設置している。それぞれ授業科目の内容および形態を考慮しつつ、単位制度の趣旨に沿って単位を設定している。「論文(博士・修士)」審査基準の明確化については、2011年度に研究科委員会においてその提議を受けて早速検討を始めたところであり、試行期間を経た後、2014年度に向けて策定・公開の予定である。

##### (4) 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

カリキュラム研究委員会傘下に設置のFD委員会(研究科)の下で、年に3回のFD研修会(研究科)を開催している(うち1回は非常勤講師対象)。専任教員対象のものとしては、授業シラバスの充実を意図した、教育課程の編成・実施方針やカリキュラム・マップにおけるそれぞれの授業の位置づけなどについて認識を深めるべく、研修を積み重ねている。非常勤講師対象のものとしては、教育課程の編成・実施方針など、高等教育における課題への神学部の取り組みについ

て、また普段の授業運営における問題点など、神学研究科教務担当教員と情報を共有する場となっている。過去3年間のFD研修会(研究科専任教員対象)は、学部の項で述べた共通課題・テーマでの合同開催のほか、研究科独自の課題研究についても実施している。<sup>4.3-135)</sup> なお、教育成果について定期的な検証方法の構築には至っていないが、FD研修会(研究科)でのこのような取り組みが、教育課程や教育内容・方法の改善に結びつき、新たな検討の機会となっている。「授業評価」については全学的に調査を実施し、個別科目についてだけでなく、カリキュラム構成についての学習効果、あるいは全体的な学習環境などについても言及している。しかしながら回収率は芳しくなく(2008年度からの3年間で平均10%弱)、まずはその点について改善が求められている。ただし、院生会(院生による自治組織)からの「研究環境に関する要望書」(2011年6月)、「日本基督教団補教師検定試験に関する件」(2011年9月)を受け、学習・研究環境の改善や進路支援に取り組むとともに、授業内容へも反映できるものについては検討を行っている。この院生会の対応窓口は教務学生委員が務め、必要に応じて懇談などを実施している。

## 2 点検・評価

### (1) 効果が上がっている事項

なし

### (2) 改善すべき事項

なし

## 3 将来に向けた発展方策

### (1) 効果が上がっている事項

なし

### (2) 改善すべき事項

なし

## 評価結果

### 総評

「学位取得(修士・博士)までのプロセス」にて、博士課程前期課程から継続して研究計画書に基づいた研究指導がされている。また2006(平成18)年度から「複数指導制度」が導入され、研究課題の多様化に込んでいる。博士課程後期課程においては「神学研究会」発行の『神学研究』への論文投稿および学会での研究発表を促すなど、教育課程の編成・実施方針に基づいた適切な教育方法が実施されている。

「3つのポリシーとシラバスについて」をテーマに「FD研修会」を実施し、シラバスに沿った授業実施に向けて教員の共通理解を図ったが、検証の結果、授業の「到達目標」に関する記載がいまだ不十分であることから、2013(平成25)年度に向けて記載の徹底を図っていく意向が示されている。

教育方法の検証は「FD委員会」が主体となり、教育課程や教育内容・方法の改善に向けて活動を進めている。また「院生会」からの「研究環境に関する要望書」を受ける

制度があり、学習・研究環境の改善に取り組むとともに、授業内容へ反映できるものについて検討している。

## 第4章 教育内容・方法・成果

### 4. 成果

#### 1 現状の説明

##### (1) 教育目標に沿った成果が上がっているか。

教育成果の測定についてはまだ模索中であるが、2008年度から2010年度博士課程前期課程修了者の進路把握状況は次の通りである。理念・目的にて言及される専門的職業人(伝道者)の育成については、継続的に成果を挙げている。2008年度修了者11名(伝道者4名、就職2名、進学2名[うち、関西学院大学神学研究科博士課程後期課程・1名]、不明3名)、2009年度修了者9名(伝道者4名、就職2名、進学3名[うち、関西学院大学神学研究科博士課程後期課程・2名])、2010年度修了者6名(伝道者3名、就職1名、進学2名[うち、関西学院大学神学研究科博士課程後期課程・1名])2011年度修了者11名(伝道者5名、就職4名、進学2名[うち、関西学院大学神学研究科博士課程後期課程・1名])また、博士号(課程博士)を2007年度以降2010年度まで毎年度1名に(2010年度の1名は在籍期間3年での学位取得)、2011年度は4名に授与し、研究者養成においても実績を挙げている。<sup>4.4.45)</sup>

##### (2) 学位授与(卒業・修了認定)は適切に行われているか。

学位授与基準および修了認定基準に則って、審査委員会報告に対する手続きの妥当性を検証する仕組みを検討中である。学位授与方針の策定(明文化)を行ったことを踏まえて(2010年3月研究科委員会承認)、継続検討の必要がある。博士学位申請論文の審査にあたって、2008年度から審査委員のうち副査1名は、学外あるいは研究科外の者としている。また口頭試問を公開とし、厳正かつ適切な審査の確保に努めている。なお、「論文(博士・修士)審査基準の明確化」については、2011年度に研究科委員会においてその提議を受けて早速検討を始めたところであり、試行期間を経た後、2014年度公開に向けて策定の予定である。

#### 2 点検・評価

##### (1) 効果が上がっている事項

なし

##### (2) 改善すべき事項

なし

#### 3 将来に向けた発展方策

##### (1) 効果が上がっている事項

なし

##### (2) 改善すべき事項

なし

## 評価結果

### 総評

修了要件については『履修の手引』により学生に明示されている。学習成果を測る指標として、博士課程前期課程では進路状況調査結果をその1つとしている。

学位授与にあたり、2013（平成25）年度から学位論文審査基準が定められ、学生に明示されている。論文審査については、論文審査委員会による厳正な審査がなされており、適切である。



## 第5章 学生の受け入れ

### 1 現状の説明

#### (1) 学生の受け入れ方針を明示しているか。

神学研究科では、神学を専攻領域とし、その中に4つの研究分野(聖書分野、歴史・文化分野、組織・思想分野、実践分野)を設けている。神学研究科設置以来の目的として、キリスト教界における宣教活動を担う伝道者(牧師・聖書科教師など)の育成を掲げてきた。その伝統を守りながらも、2008年度より履修コース制を導入して、キリスト教神学、キリスト教思想・文化の分野で、より広い関心から高度な研究が行えるようになっている。

##### <博士課程前期課程の学生の受け入れ方針>

キリスト教神学・伝道者コースにおいては、所属教会から推薦を得られる者に受験資格を認めることで、神学的な研鑽を深め、多様な宣教の現場で活動する高い志を持つ者を受け入れる。キリスト教思想・文化コースにおいては、受洗の有無を問わず、キリスト教が人類の歴史の中で生み出してきた思想や文化的財などの学際的領域に興味を持つ者を幅広く受け入れる。

##### <博士課程後期課程の学生の受け入れ方針>

神学の基礎的な知識に裏打ちされて、専門的な知識と思索を深め、各自の専門領域において優れた特色ある研究を行える者を受け入れる。

方針は、入試検討委員会(研究科)および神学研究科委員会での検討を経て、入学試験要項(募集要項)に掲載するとともに、<sup>5-33)</sup> 関西学院公式Webサイトの神学研究科のページにて公開している。<sup>5-34)</sup> ただし、特にキリスト教神学・伝道者コースにおいて学部教育との継続を重視しており、学部の学位授与方針の策定・明示がいったん完了したことから、改めて検証を開始する。

#### (2) 学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に学生募集および入学者選抜を行っているか。

現行、博士課程前期課程においては、一般入試、社会人入試、外国人留学生入試を用意しているが、たとえばキリスト教神学・伝道者コースの募集においては、学生の受け入れ方針で言及される伝道者の育成を実現すべく、いわゆる洗礼条項を設けるとともに、教会生活の実績を考慮し、所属教会からの推薦書の提出を義務付けている。キリスト教思想・文化コースにおいても、提出される「研究計画書」などによって、キリスト教に基づいた思想や文化的財などの学際的領域に興味を持ち、研究しようとする者であるかを念頭に置き、公正かつ適切に選抜を行っている。後期課程においては、一般入試、外国人留学生入試を用意している。それぞれの入試制度において上記学生の受け入れ方針の各要素がどのように実現されているか、さらなる整理・明文化が必要である。2008年度に履修コース制を導入した後、毎年度キリスト教思想・文化コースへ学生を受け入れている(2008年度1名、2009年度3名、2010年度3名、2011年度1名。2008～2010年度に受け入れた3名は、2010年度～2012年度に後期課程へも進学)。また後期課程については、いわゆる課程博士の取得につながる者を、求める入学者像のひとつの柱としているが、その方針に適切な学生を受け入れ、近年は順調に輩出しているといえる(課程博士輩出数:2007～2010年度各1名、2011年度、4名。なお、2010年度の1名は在籍期間3年での学位取得<sup>5-78)</sup>)。

#### (3) 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき

### 適正に管理しているか。

2009年度から2012年度の収容定員に対する在籍学生数比率は以下のとおりであり(過去年間平均:前期課程1.10、後期課程平均1.03)<sup>5-88),5-113)</sup>、適切に推移しているといえる。なお、入学定員に対する入学者数比率も過去年間平均でそれぞれ前期課程0.94、後期課程0.90である。<sup>5-65)</sup>

#### <前期課程>

	定員数	在籍者数	在籍学生比率	入学者数/入学定員
2008年度:	20名	22名	1.10	0.90
2009年度:	20名	21名	1.05	0.90
2010年度:	20名	21名	1.05	1.10
2011年度:	20名	26名	1.30	1.10
2012年度:	20名	20名	1.00	0.70

#### <後期課程>

	定員数	在籍者数	在籍学生比率	入学者数/入学定員
2008年度:	6名	7名	1.17	1.00
2009年度:	6名	7名	1.17	1.00
2010年度:	6名	7名	1.17	1.00
2011年度:	6名	5名	0.83	0.50
2012年度:	6名	5名	0.83	1.00

### (4) 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。

定期的に検証する仕組みとして、研究科委員長を長とする入試検討委員会(研究科)における報告書の作成を検討しているが、いまだ具体的な内容については整備できていない。入試実行は、大学院入試実行委員会がその責を負うが、毎年度の実行に際しては都度、出題内容、実行体制についてチェックを行っている。今後は、学生の受け入れ方針によって明確化された入学者像と、各入試制度(前期課程一般、社会人、外国人留学生、後期課程一般、外国人留学生)における入学者像のあいだでの整合性に関する検討を、学部の学位授与方針を踏まえて検討していく。

## 2 点検・評価

### (1) 効果が上がっている事項

なし

### (2) 改善すべき事項

なし

## 3 将来に向けた発展方策

### (1) 効果が上がっている事項

なし

(2) 改善すべき事項

なし